

ネットラレ妻

未咲

最愛の妻は、

彼女の上司に寝取られていた

沢見独去





# 1 発端

---

あなたは勤めている会社を出た。

あたたかな春の日差しが降りそそぐ快晴の街を、  
ゆっくりとした足取りで歩きながら、昨日の夜の  
ことを思い出していた。

ひさしぶりに妻とセックスしようとしたのだが、  
自分のものが役に立たなかったのだ。

またそれを思い出して情けなくなりながら、あな  
たは勃起不全の治療に医者に行くかどうかを昨日  
からずっと悩んでいる。

結婚して三年。こんなことは初めてだった。

妻の未咲は二十八歳。

取引先の会社に打ち合わせで行ったとき、新卒と

して入ってきた彼女と出会った。好みどんぴしゃだったあなたは、必死になって口説いた。

ラッキーなことに彼女もそれに応えてくれて、交際たった半年で結婚した。

結婚したあとも、共働きだった。あなたは最近、本社勤めから同じ都内だが系列の工場へと転勤になった。工場は年中無休で動いている。土日休みからシフト制に変わり、すれ違うことも多くなっていた。

そのあたりのことも、今回の勃起不全の原因のひとつに違いないとあなたは思っている。

昨夜自分のものが役に立たなかった時、妻はやさしくなぐさめてくれた。



「きっと……疲れてるのよ……またすぐに元気になるわ」

そう言ってくれた彼女の少し心配げな表情が忘れられなかった。

あなたが転勤になる頃から、二人のあいだには夜の営みがなかった。未咲は早く子どもが欲しいようで、しばらくは子作りに励んだのだが、転勤で環境が激変してしまい、それどころではなくなってしまっていた。彼女からそれを求めてくることもなくなっていた。

気を使ってくれているのだろう。あなたはそう思っていた。しかしこのままではいけない。あなたは大きくため息をついた。

今日は昼から早退にしてもらった。ネットで勃起不全の治療をしている泌尿器科の病院も探した。今の今まで行くかどうか悩んでいたが、このまま



だと愛する妻を満足させられない。

勇気を振り絞って、その病院のある駅へと向かうことにした。

初めて降りる駅だった。駅前には大きな公園があるようで、電車の窓から緑が広がっているのが見えた。

あなたは改札口を通り、駅前に出た。スマートフォンを取り出し、調べておいた病院の場所を確認する。駅から歩いてすぐの場所のはずだ。

道を探すためにあたりを見渡した。

その時。

ふとした違和感を覚えて、ちょうど駅の改札口から出て公園へ向かう道を歩いているカップルに目を留めた。仲よさそうに寄り添って歩いている女性の顔を見て、あなたは全身をこわばらせた。

「えっ！？」

思わず口からそんな言葉が出る。心臓がどきりと大きく跳ねる。

……あれは……あれは、妻ではないのか！？

もう一度、あなたは目をこらす。女性の横顔を見つめる。

間違いなかった。

やはり妻だ。妻が……男と歩いている。しかもあなたが見たことのないようなファッションで、輝くような笑顔を見せている。

あなたは反射的に物陰に身を隠した。そしてそこから、二人の姿を盗み見る。

隠れるあなたのすぐ前を、二人が歩いていく。



なぜ彼女がこんなところを……しかも男と……。あなたは混乱した頭で考え、それから妻の隣で笑う男の顔をようやく確認した。

「……え？」

その男は、あなたの知った顔だ。

「松木！？」

あなたは思わず男の名前を声に出した。それは未咲の上司だった。彼女の所属する課の課長をしている男で、結婚式にも参列してもらったし、家族連れでうちに遊びに来たこともあった。

あいつが……いったいなぜ？

あなたは戸惑い。混乱する。

現実を受け止められない。ただただ怖くて、二人の前に飛び出していくことができなかった。



「……どうしてだ……未咲……」

だが目の前の二人はなにやら楽しそうに笑いあって、そのまま道を歩いていく。

迷ったのは一瞬だった。

あなたはその二人のあとを尾行し始める。

## 2 公園で

---

着いたのは公園だった。ひろびろとした芝生が広がる中を、妻と松木が奥へと進んでいく。

目が離せなかった。とてつもなく嫌な予感がするのに、あとをつけるのをやめられなかった。  
あなたの背中に嫌な汗が伝う。

人の気配が次第に薄れてくる。





やがて公園の奥まった場所の、木々で覆われてまわりの目から隠された一角で、二人は立ち止まった。

あなたはこんもりと繁った緑の植えこみに身を隠し、そこから慎重に彼女たちを覗いた。

妻が、上機嫌で男に話しかけている。

先ほどからドクドク、ドクドクと心臓が痛いくらい暴れている。

二人の会話が、そばで身をひそめるあなたのところに届いてくる。

「なあ、未咲くん」

「はい、課長？」

「言われたとおりにしてきたか？」





「えっ？……な、なんのことです……か？」

それを聞いて、松木がいやらしそうに笑った。

「下着。言われたとおり、履いてないよな？」

恥ずかしそうにうつむいて、未咲は消え入るような声で言った。

「え？……あ、あの……その………はい」

松木が満足そうに頷いた。

「確認するから、スカートをまくりなさい」

「えっ！？……そ、そんな……恥ずかしいです」

彼女は視線をさまよわせ、もじもじとスカートの裾を握った。





「いいから。ほら、早く」

「……………わ、わかりました…………」

彼女の両手がスカートの裾をゆっくりと持ち上げていく。男はそれをいやらしい目でじっと見つめている。

自分の目が信じられなかった。

しかしここで起こっていることは現実だ。

あなたは生唾をごくりと飲みこみ、それからまた二人の淫靡な姿を覗き続ける。

「ああっ…………恥ずかしいです……………そんなに…………見ないでっ」

未咲が甘えた声でささやく。





「ちゃんとするつるに剃ってるな」

松木が満足そうににやりと笑った。

「ダンナがこれ見たら、どう思うだろうなあ」

「いやっ、言わないでくださいっ……課長がどうしてもって……言うからっ……あんっ」

その声には性的な興奮が潜んでいることに、あなたは気づいている。

彼がいやらしい表情を顔にこびりつかせながら妻の背後に回った。

男の手が、妻の乳房に伸びる。

「きゃ」

彼女は小さく悲鳴を上げ、その手から逃れようと



体験版は以上です。  
この続きは、製品版でおたのしみください。